

Injury Alert (傷害速報)類似事例

柄付き鍋内の熱湯による熱傷 (No. 125 キッチンで受傷した熱湯による体幹・四肢熱傷の類似事例 1) ㊦

事例	基本情報	年齢：3歳 7か月 性別：女児 体重：15kg 身長：96cm
	家族構成	父・母・兄（8歳、9歳）・本児
	発達・既往歴	特記事項なし
臨床診断名		前胸腹部、右臀部、右大腿および右下腿の浅達性Ⅱ度熱傷（20%）
医療費		入院 1,073,460円 外来 5,070円
原因対象	対象名称	柄付きの鍋（雪平鍋）、直径16cm、容量1,200mL（図1）
	入手経路 使用状況	店舗で購入
発生状況	発生場所	自宅のキッチン
	周囲の人 周囲の環境	キッチンで母とともに調理をしていた。普段から調理には関わる環境で生活しており、年長の兄たちも積極的に料理をし、家族にふるまうこともあった。
	発生年月日	2025年7月X日（日）午前7時30分
	発生時の 詳しい様子 受診までの経緯	自宅のキッチンで母が朝食の準備をしていたところ、本児が「お手伝いする」と言ったので、一緒に調理をしていた。母が傍につき添い、本児は踏み台（1段の折り畳み式、幅32cm、高さ22cm、安定性あり）に乗っている状態で、向かって手前左側のガスコンロで、柄付きの雪平鍋（直径16cm容量1,200mL）（図1）に、お湯を1,000mL程度沸かし、そうめんを茹でていた。児は3歳からよくお手伝いをよくしており、コンロでのホットケーキ作り、同様の鍋を用いた味噌汁作りも経験していた。午前7時30分、コンロの正面にいた本児に、本児の左側にいた母が鍋の柄を指さし「ここは熱くないから触っても大丈夫」と指導した。その後、本児が鍋の柄を握り、体重をかけたため柄に下方向の力がかかり、鍋本体が本児の方向に倒れ、沸騰したお湯が本児の前胸部、右下肢にかかった。本児は綿のパジャマの上下を着ていた。家族がすぐに救急要請し、医療機関を受診した。救急隊が到着するまでの約15分間は、母が浴室で冷水シャワーをかけて冷却していた。

<p>医療機関受診時 以降の治療経過 転帰</p>	<p>医療機関搬送時、呼吸・循環は安定していた。右側 2/3 程度の前胸腹部、右臀部～大腿～下腿（非全周性）に計 20%の浅達性Ⅱ度熱傷を認めた(図 2、3)。顔面や頸部には熱傷を認めなかった。広範囲熱傷であったため、Baxter 法を用いて初期輸液を開始した。鎮痛鎮静下に洗浄処置を施行し、炎症性皮膚疾患治療剤および熱傷被覆・保護材で被覆後、入院加療とした。入院後も鎮痛鎮静下に、洗浄・湿潤療法を継続した。X+1 日、全身状態は安定していたが、創部の悪臭、膿性浸出液、発熱を認め、感染が疑われたため、抗菌薬の静脈投与を開始した。創部の経過は良好であり、X+9 日に抗菌薬の投与を終了し、X+12 日に退院となった。退院時、創部は概ね上皮化傾向だったが、前胸部、右大転子部、右足関節周囲の一部創部に肥厚を認めた。その後、同部位に瘢痕形成があり、形成外科外来の通院を継続している。</p>
<p>キーワード</p>	<p>雪平鍋、キッチン、お手伝い、熱傷</p>



(図 1)原因製品と同型の柄付き鍋（直径 16 cm、容量 1,200mL）



(図 2)前胸腹部の熱傷



(図 3)右臀部～大腿～下腿の熱傷

<委員会からのコメント>

1. 小児熱傷の現状とキッチンでのリスクについて

小児の熱傷の多くは、家庭内での高温液体による事故であり、特にキッチンでの調理中に発生するケースが目立つ。実際、関西医科大学附属病院の調査では、乳幼児の熱傷原因の約 70%が熱湯や汁物などの加熱性液体によるものであり、その多くが家庭内で発生している¹⁾。また、消費者庁と国民生活センターの共同調査によれば、2 歳以下の乳幼児の炊飯器や電気ケトルによる熱傷事故は 333 件、グリル付きコンロによる事故は 50 件に上り、キッチンが小児にとって高リスクな環境であることは明らかである^{2) 3)}。

2. 調理参加の推奨と安全性の課題

一方近年では、食育や非認知能力の育成の観点から、子どもの調理参加が推奨される傾向がある。調理を通じた学びには多くの利点があるが、高温液体を扱う場面では、年齢や身体的発達に応じた対応が不可欠と言える。たとえば、身長が鍋に届かない年齢では、熱湯を扱う調理は避け、「混ぜる」「切る」「焼く」など比較的安全な工程に限定することが望まれる。

3. 本事例の特徴と予防のための具体策

今回の事例では、保護者が傍に付き添い、丁寧に対応していたにもかかわらず、広範囲熱傷という重大事故が発生した。このことは、「見守り」や「注意」だけでは予防が難しいことを示唆している。踏み台の高さや安定性の判断は家庭では難しく、わずかな差が事故につながる可能性があるため、慎重な対応が求められる。また、調理器具の選定も重要で、長い柄のある片手鍋は不安定になりやすく、子どもが体重をかけた際に転覆するリスクがある。高温液体を扱う際は、両側に短い取っ手のある両手鍋を使用したり、取り外しのできるものを使用するなど、器具の形状にも配慮が必要である。

4. 「火育」における段階的アプローチの重要性

「火育」⁴⁾の視点からも、火や熱の危険性を学ぶことは重要ではあるが、それは安全な環境と段階的な経験の中で行われるべきである。年齢に応じたステップを設け、危険性を理解しながら安全に関わる機会を提供することが求められる。

5. おわりに

本事例を通じて、家庭や教育現場における調理参加のあり方を再考し、事故予防のための具体的な工夫や情報提供の必要性を改めて認識することができた。

<参考文献>

1. 平尾太祐, 日原正勝, 光井俊人, 他. 当院における過去 11 年間の乳幼児新鮮熱傷症例の検討. 熱傷. 2023;49:111-116.
2. 政府広報オンライン. 乳幼児のやけど事故にご注意を!. <https://www.gov-online.go.jp/article/201802/entry-9262.html> (参照 2025 年 11 月 12 日).
3. 国民生活センター. こんろのグリルでの子どものやけどに注意 2017 年 9 月 21 日. https://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20170921_1.pdf (参照 2025 年 11 月 12 日).
4. 東京ガス都市生活研究所. 今こそ子どもに伝えたい【火育】とは? 災害時にも役立つ「火」を学ぼう. ウチコト. 2025 年 2 月 26 日更新. <https://uchi.tokyo-gas.co.jp/topics/5064> (参照 2025 年 11 月 12 日).